


令和7年度PDCAサイクル(認知症・せん妄ケアサポートチーム)



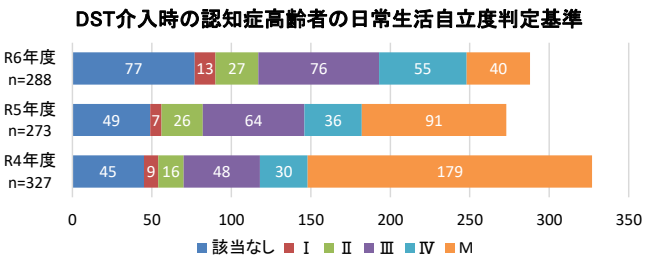
P

認知症・せん妄ケアサポートチーム(以下DST)が介入した患者のうち、認知症高齢者の日常生活自立度判定基準でMランク(著しい精神症状等)に該当する方の人数は、毎年多くを占めていた。しかし令和5年度よりその数は減少し、DST活動により病棟の初期対応力が徐々に向上してきていると考えられる。また、身体的拘束を行わず工夫して対応しているケースも多くみられるようになった。今年度からDSTは身体的拘束最小化チームも兼ねており、より一層身体的拘束最小化に向けたケアの質向上を目指し、患者が安心・安楽に入院生活を送れるような方策を多職種協働のもと検討していきたい。

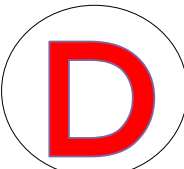
【今年度の目標】

1. 認知症・せん妄、身体的拘束最小化に向けた勉強会と参加型の研修会を実施し、知識の定着を行う。
2. 全職種へ身体的拘束の実施状況を周知・代替案の提案を行う。

DST介入時の認知症高齢者の日常生活自立度判定基準



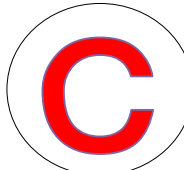
年度	該当なし	I	II	III	IV	M
R6年度 (n=288)	77	13	27	76	55	40
R5年度 (n=273)	49	7	26	64	36	91
R4年度 (n=327)	45	9	16	48	30	179



D

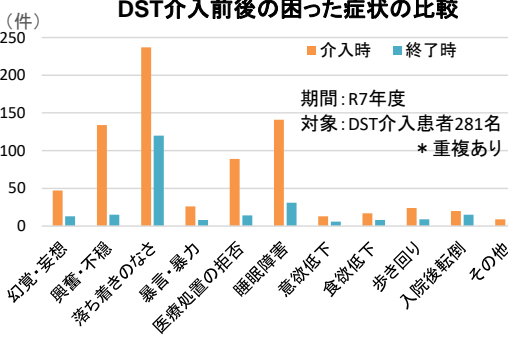
認知症ケア対応力・せん妄ケア対応力の向上と身体的拘束最小化に向けた取り組みを行った。

1. 研修会の実施
 - 1) 全職員に対して集合研修とオンデマンド研修を実施した。
 - 2) 認知症・身体的拘束に関する勉強会を開催した。
 - 3) 身体的拘束最小化に向けたオンデマンド研修を実施した。
2. 病棟との連携
 - 1) 認知症ケア担当者にて身体的拘束の疑似体験を行うことで患者の思いに寄り添った。
 - 2) 認知症のある患者の見当識を保持するための手段を共有した。
 - 3) 退院前の合同カンファレンスや倫理カンファレンスに参加し、認知症ケアの継続支援に努めた。
3. 身体的拘束最小化に向けた取り組み
 - 1) 多職種カンファレンスで、身体的拘束最小化に向けた代替案の検討を行った。
 - 2) 「身体的拘束だより」を定期発行し、全職員へ身体的拘束最小化への意識向上に努めた。



C

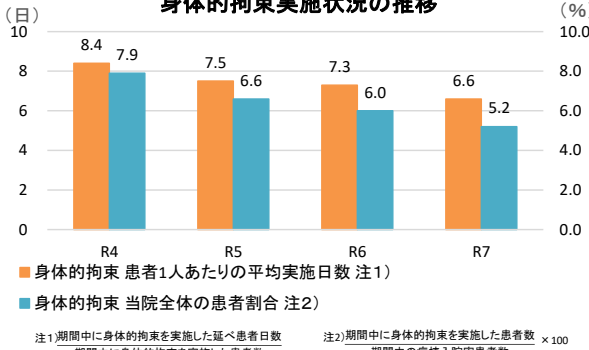
DST介入前後の困った症状の比較



期間: R7年度
対象: DST介入患者281名
*重複あり

→ DST介入前後で、困った症状は全ての項目で減少

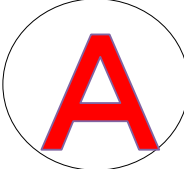
身体的拘束実施状況の推移



注1) 期間中に身体的拘束を実施した延べ患者日数 / 期間中に身体的拘束を実施した患者数

注2) 期間中に身体的拘束を実施した患者数 / 期間中の病棟入院実患者数 × 100

→ 患者1人あたりの平均実施日数・当院全体の実施割合は、



A

1. 認知症患者・せん妄患者に寄り添ったサポートを継続する。
 - ・研修会を通して、認知症・せん妄に関する知識の定着を図る。
 - ・認知症高齢者ケア院内認定看護師、認知症・せん妄ケアサポートチーム病棟担当者を中心に個別性のあるケアの方法を検討する。
2. 身体的拘束最小化のための代替案の検討を継続する。
 - ・「身体的拘束だより」を定期的に発行し、全職員に、身体的拘束最小化への意識づけを行う。
 - ・「身体的拘束最小化チームカンファレンス」を実施する。
 - ・代替案の検討を病棟スタッフと行い、良い事例は、病棟担当者等を通じて共有する。